

●「SHINWA WALK～伝説そぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、賢士の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

SHINWA WALK 12

高座結御子神社の井戸のぞき伝説



守り神が住む井戸に  
虫封じの御利益が

高蔵たかくらにある高座結御子神社は、熱田神宮の摂社で、承和2年(835年)の創建とされています。祭神は、速達日命はやたしひのみことの御子・高倉下命たかくらしたのみこと。これは天香具山命あまのかぐやまのみことの別名。高倉下とは、高倉主、つまり霊剣を納めてある倉の主という意味です。

また、高倉下命は神武天皇東征伝説にも登場し、神武天皇の危機の際、霊剣を献上し、その危機を救っています。俗に高蔵神社とも呼ばれていて、一般には「たかくらさま」といわれています。子育ての神として知られていて、毎年6月1日の例祭には子供の虫封じになるといわれる「井戸のぞき」が行われます。木俣神を祭神とする御井社の前に御井(井戸)があり、この井戸を子供にのぞかせてその水をいっただくと、「虫封じ」の御利益があるといわれています。

井戸のぞきの起源は、伝説の時代までさかのぼります。昔、王女が重病で苦しんでおられた時、竜に化して病を治したのが木俣神の御霊で、住処がなかったため、その功績により与えられたのが、この高座の井戸であつたとい

います。それでこの井戸の水をいっただくと、物の虫が治ると語り伝えられるようになったといわれています。

ギリシャ神話で竜といえば、カドモスが退治したアレスの泉の竜が有名です。ゼウスは自ら白い牡牛になりエウロペをさらひ、クレタ島に連れていき、エウロペと結ばれます。やがて生まれたのがミノス。彼は後にクレタの王として名を馳せることとなります。



竜を倒してテバイ建国  
繁栄するも娘に祟り

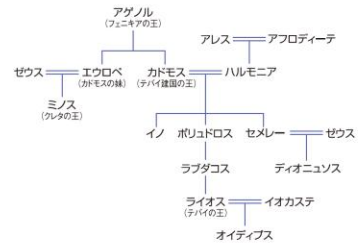
そんなことは知らないエウロペの兄・カドモスは、突然姿を消した妹を探すため、旅に出ます。が、エウロペはみづかりません。カドモスはアポロンの神殿に行って神のお告げを聞くと、「もうエウロペを探すのはやめて、牝牛の後に付いていき、横になった場所に都を立てよ」と命が下りました。

カドモスは自分の前に歩いている牝牛をみつめ、その後を付いていくと、ある地点で止まり、横になってしまいました。お告げ通り、その場所にアテナ像を立てました。実はその場所こそ、後にテバイの都になる所です。近くに軍神・アレスの泉があり、清水を汲んでくるよう部下に命じました。

部下たちがなかなか戻ってこないで、彼らを探しに泉に行きます。すると、泉には竜が住んでいて部下たちは全滅してしまつたのです。怒つたカドモスは岩を投げつけ竜を退治し、竜を生けにえとして捧げると、女神アテナが現れ、竜の牙を地面に撒くように命じました。その通りに撒くと、そこからたくさんの兵士が飛び出してきました。彼らの真ん中に石を投げると、お互いに戦い始め、5人だけが残り

ました。カドモスはその5人を手下にして、その地にテバイの都を築き、アフロディーテとアレスの娘・ハルモニアと結婚しました。カドモスが興したテバイ王国は後々まで繁栄し、ディオニュソスを生んだセメレーは娘であり、オイディプスもカドモスの子孫です。

しかし、カドモスが退治した竜はアレスの番人役であり、それが災いしてカドモスの娘・セメレーとイノは不幸な死に方をすることになったのです。



▲井戸のぞき伝説が伝えられる高座結御子神社。

アレスの泉の竜も、高座の井戸の竜と同様、守り神だったのでしよう。竜を守り神として大切に祀つたことで、虫封じの御利益を賜つた高座の井戸伝説。竜を退治してしまつて2人の娘たちが祟られたカドモス。どちらも守り神は大切にしましようという教訓です。竜を退治せず守り神にしていたら、カドモスの娘たちの運命も違つていたのかもしれない。



※次回は、熱田神宮周辺に伝わる蓬萊山伝説をお送りします。お楽しみに。

■写真/Kiyoshi K ■イラスト/Rei ■取材文/Icarus